幼兒の發問の研究

黑瀨艶子

○發問のはじめ

子供が、三つ四つになつて、言葉が、どうやらつかへるようになりますと、「これは何？」と見るものの聞くものについて、たえまなく問ひます。大抵の辛棒づよいお母様も、「うるさい子ねえ」とつひいひたくなる程、聞きたがります。ある學者はこの時代を「質問狂（クエスチョニングマニア）」の時とさへ申して居ります。この時期の「これは何？」といふのは「これは何といふ名？」といふつもりで聞くのです。幼兒は自分に名前があるので、あらゆる周圍のものも名をもつてゐるといふことを思ふので、何でも、先づその名を知らうとします。そして外界の事物の名稱を覺えて參ります。ですから、この頃の幼兒には、たゞ簡單に「何々です」と名を敎へてやれば、それで滿足して居ります。けれどもこれがいつまでもつゞきは致しません。五歲六歲七歲と次第に大きくなつて參りますと、「なに？」といふやうな簡單な質問でなしに、「なぜ？」ときくようになります。此「なぜ？」ときく子供の心持には、またいろ〳〵の意味がはいつてゐるようです。

○過去の經驗から判斷して

たゞ、單純に外界の刺戟をとりいれる事に忙しき子供の頭は、やうやく進んで、たゞ何でもかでもとりいれるといふことでなしに、あの小さい頭腦で、子供自ら考へるといふことを始めて參ります。この時に、自分に親しみのある、嘗つて知つて居る事柄でなしに、新しい、知らない現象があらはれて參りますと、子供は自分の過去の經驗でこれを判斷しようと思ひます。ところが、それが、どうもうまく判斷しかねますと、そこで、何故だらうと疑問をいだくようになります。次に私の經驗のうちの二つ三つをあげてみませう。

△嘗つて幼稚園で食事の時に皆うれしさうに小さな

口をうごかして四人づゝならんでゐる机の一つを占めてゐたSさんが、突然、箸のはこびをやめて、
「先生！羊でしたつけ、紙をたべるのは？」
「えゝさうですよ」
「なぜ、紙をたべるの？」
（私は何と答へようかと考へてゐると）隣のKさんが、すぐこれをひきとつて、
「そりあ君、わかつてゐるさ、羊は白いからさ」。
この答でSさんもすつかり満足しました。Sさんは自分が紙をたべないので羊の事が氣になつたのです。
△動物園に參りました時、水禽類のゐるところで丁度鷺鳥が、水掻きの働きをやめて、水の上を流れるように浮いて行くのを見て、Yさんは、ひとりごとのやうに。
「何故、あの鷺鳥は游がないのに浮くのかしら」。
たぶんこの子は、大抵のものは水に入れゝば沈むものといふ經驗をして、また、鳥は泳いでゐれば、浮くがさうでないのに、水の上に流れるように行くのが不思議であつたのでせう
△同じ所で、水の中に立つて居る鶴を見て、
「あら、この鶴は、なぜ松の木にとまらないんですか」と一人がきゝました。
子供は一つのことを經驗するとそれを何にでも應用するもので「松に鶴」「石に龜」といふ句を兄さんが復習してゐる傍できゝかぢつたこの子としては、無理もない質問でせう。
△やはり動物園に行く途中でした。幼稚園の子供等にとつては大遠足のよろこびでありましたが、Mさんが、
「動物園はね、遠い〳〵奥のくらい所にあるんですね。あそこには、猿や、熊や、兎が居るのに、何故、金太郎さんはゐないんでせうね」。
と、私の顔をのぞき込みました、Mさんは金太郎の話を思ひ出して猿や、熊や兎が居れば、きつと金太郎が居ると一人ぎめにきめこんで、この法則で、動物園に居る、金太郎のお友達を、考へて居るのでした。
△遊園のお池に金魚と鯉を見にまゐりました時に、大きな鯉の間をいそがしさうにおよぎまはる子鯉を見て、一人が、
「鯉にも赤ちやんがゐる」と、いひますと、

○さんが、まるい眼をなほまるくして、
「おや、鯉にはお乳がない。先生　鯉はどうしておつぱいをのむのですか？」と。

○「何の目的で」といふ意味で

更に、同じ「なぜ」といふ問も、その意味は餘程進んだものとなつてまゐります。「何の目的で」といふつもりで聞きます。これはおぼろ氣ながらに、物事には目的があるといふことがわかつて來るためかと思はれます。

△物忘れをせぬために指を紙捻で結んで居りますと、I子さんが、
「これ、なぜ？」
「ご用を忘れないように」。
「どうして？」
「澤山に、御用があつて、かうしておかないと忘れます？」。
「さう、大變ね」

△眼鏡をかけるようになつた時、S子さんが、
「どうして眼鏡をおかけになるの？」
「お眼がわるくなつてね、かうしないと、皆さんのお顔が二つに見えますから」。と、うつかり眼の樣子をはなすと、S子さんは、不思議さうな顔をして
「あら、それぢや、眼鏡をかければ、四つに見えるでせう。眼が四つおありになるのですもの」。

子供と一日遊んで居りますと、幾度かこの意味の「なぜ」といふ問をきゝます。「なぜ、お母さんのお箸は黑いの」とか、「なぜ、木の葉は落ちるのでせう？」とか、かなりにこの種類の問をするものです。

○物の本性に關する疑問

幼ない子供の頭にも、昔からの哲學者の解決し得ない、物の本性に關しての疑問がおこるものです。

「なぜ、私達は眼が二つあるのですか」。とか「なぜ金魚は赤いのですか」。とか「なぜ、馬は足が四本で、私達は二本なんですか」。などゝ、いくら大人でも、答へようのない質問を致します。かういふ時にまた、子供は子供相當に、さつさと自答してかたづけてゆくことも多いものです。

△ある風のつよい日に庭にある一本の細い樹を見つめてゐた六歳のK子さんが、
「何故この木はこんなに細いのでせう？」

と私に聞きました。さて何と答へたらよいかと思つてゐますと、

「あゝ、わかりました。風があたるからですね」

と、さつさと自答して滿足してゐました。

この意味での「なぜ」といふ問に對しては恐らくいくら大きくなつても答を得られないものが多いことでせう。物の根源といふところになりますと、全くわからなくなります。かういふ問を子供からかけられる時にはいつもある哲學者が、「我々人間は「何故」(why)といふ問を發する資格はない、たゞ「どういふ樣に」(How)ときゝ得るのみである」。と申しましたことを、心に思ひおこします。

○物の行衞を

また、幼兒の質問のうちには、物の行衞を氣にしてきくのがあります。私共大人の頭は、いろ〳〵人事上の考へることが忙しいので、眼にふれるもの、耳にきくものゝ一々出所や、行末をそんなに心配する餘裕はありませんが、幼兒は、なか〳〵、物の行衞を氣にするもので、「風は何處へふいて行くのでせう?」とか、「あの鳥は何處へ行くのでせう?」とか申します。

△ある日、散歩に行く途中に、木の新しい切株があつたのを見つけた七つになるAさんは、

「木がきられましたね。この切つた木は何處へ持つて行つたのですか?」。

と、切株の行衞までも心配して居るのでした。

○物の起源を

ものゝ行衞を心配するとゝもに幼兒はまた物の起源をたづねるものです。

「坊は誰から生れたの?」

「お母さんから」

「それぢやお母さんは?」

「お祖母さんから」

「お祖母さんは?」

「お祖母さんはね、またそのまへのお母さんから」

「それぢや、そのお母さんのお母さんの、そのまたお母さんの……一番初めのお母さんは何處から來たの?」

「さうね、それは神樣がおつくりになつたのですよ」。子供は、次から次へとさかのぼつて、とう〳〵

私共が答へられなくなるまで追ひつめることがよくあります。

△さむい冬のある日七つになるTさんが、

「先生！一體、水といふものはどうして出來たのですか」。

「水はね、昔から出來てゐるので、神樣がつくつて下さつたのでせうね」。

これをきくともなしにきいてゐたKさんは

「さうすると、神武天皇の頃から出來てゐたのですね」。と、

△秋の一日、散歩の折に、ある大樹に毒茸があるのを見つけ、毒茸と敎へられてMさんが、

「どうして、毒茸といふの？」

「あの中に毒がはいつてゐますから」。と答へると、つゞけて、

「何處から毒がはいつて來たの」。ときゝます。

傍のFさんがこれをひきうけて、

「それは木がきたないからさ、さうですねえ先生！」

と、上手にこたへてくれました。

△庭に遊んでゐた二三人の子の中七歳のS子さんが、急に思ひついたやうに、

「花は何から出來るのでせう」。と、きゝました。一寸答へに困つて、「何からでせうね」。と一緒に考へて居ますと、

「あゝわかつた、種子からね」。と自答しながら、

「でも、種子は何からでせう？」とまた質問をすゝめて居ましたが、やがて、

「あゝ、さうだ、わかつた。種子は泥からですね。先生！さうでせう」。

と、問ひかへします。

「いまにあなたが大きくなるとわかりますよ。今は少し難しいから」

といへば、

「あゝ、さう、學校へ行つてえらくなればね」。

と、滿足して居つた。

○大さと距離

だんゞ子供の心が發達して、ものゝ大さや、距離の觀念が出來て參りますと、「此處から品川迄どの位ありますか」。とか、「お星樣迄はどの位遠いのですか」。などゝ問ふようになります。

△ある時、七つになるSさんが、

「月はどの位大きいのでせう？」

「どの位でせう？」と、答へかたを考へてゐますと、子供の方から、

「隨分大きなものでせうね、この机「傍の机をさす、輻三尺、長さ六尺位のもの」の半分位でせうね」。

と、申します。隨分大きいといひながら机の半分といふのですから、大きいといふ概念がどの位のものかわかりません。Sさんはこの時つゞけて

「天は高いんですね、なぜ、あんな所にお月様は居るのでせうね」。

と、ひとりごとのやうに申して居りました。

○いろ〳〵の問に答へるには

子供がよく、質問しますのは、申すまでもなく、そのやむにやまれぬ好奇心から來るのですが、また、たやすく發問し、それに答へられるといふことが、好奇心の發達の上に大切なことで、聾啞の子供が、同じ年齡の健兒ほど、好奇心が發達して居りませんのは、彼等がたづねることが出來ないためであるといふことは、多くの心理學者のみとめて居るところです。

知らないものに充ちたこの世界にやうやく目覺めかけたその時期には、何でもかでもきゝます、「何？」「何？」ときいて居ります時はその答はごく簡單でよいので、くた〳〵しい說明はいりません。子供はその答をそのまゝ信じます。この輕信といふことが、この時期には丁度よいので、もし、あの質問狂といはれる程に盛んに「何？」を連發する時期に、一々、與へられた答で滿足出來ないようでしたら、たつた一つの質問の解決にあの小さな頭は、つかれはてゝしまふでせう。

「なぜ？」といふ問をするようになりましても、我我が、熟考の結果「どうしてもわからない」と、行きつまつた最後の場合に出す「なぜ？」とは違つて、問そのものが、どれ位眞面目なのかと思はれる場合があります。あの遠慮なしに、何でもたづね、また輕輕しくその答を信じますのは、たゞ、好奇心の盛なためといふばかりでなく、波のうねりのやうに、たえず變化して行く、幼兒の思想が、次々にと轉じて、まとまりがつかないといふこともあらうと思はれます。コンペイアといふ心理學者は子供のこの發問の狀態を次のやうに申して居ります。

子供は決して一物を固執してはゐない。受取ることも早いだけに、また、たやすくこれを忘れてしまふ。まだ答がおはらぬうちに、もう、自分のきいた問を忘れてしまふものである」。

「かういふ場合には、これは眞の好奇心といふよりも、氣まぐれで、子供が、單に話すために、その演說の力をしめすために問を發するので、恰も鳥が歌ひ囀る樣なものである」。

これは子供にいつも接してゐない方にはあまりひどい言ひかたのやうに思はれるかもしれませんが、決してこれは誇張した言葉ではないと私は思つてゐます。何と申しませうか、子供の發問の態度は時に誠に呑氣なもので、馴れない人はこの呑氣さに腹を立てることさへあります。「折角きくから一生懸命に說明して敎へてやれば、子供の方では、もうさつさと他のことを考へてゐるのですもの」と本氣になつて不平をいはれる方もありますが、こゝが大人とちがふところであらうと思ひます。

また、稀には「なぜ？」といふことが口癖になつてゐる子供がないでもありません。好ましいことではありませんが、家庭で、家族の間にどうもいつも反問をするといふことがあり、或は理屈ぽい兄姉や兩親があつたとしますと、事柄がいつもなめらかに運ばずに「なぜ？」とか「どうして？」とか一々ぶつかつて行くようになります。これを見聞する子供は、ほとんど習慣的になぜと申すようになります。嘗つて當時六つのT子さんが、幼稚園で「なぜ？」を連發するのでした。「もう皆さんお室におはいりにしませうね」。といへば、「なぜ？」ときく、「お辨當をいたゞきませう」。といへば、また、「なぜ？」。それがいかにも反射的に思はれます。可笑な子だと思ひながら、なるたけこの癖を出す機會をつくらぬようにと氣をつけて居りました。ところがある時、T子さんのお母さんが、當時四つになる弟のYさんをつれて來られました。姉さんと一緒にしばらく遊んでゐましたが、やがて、お母さんが、「さあもうYさん、かへりませうね」といひますと、Yさんは「なぜ？」と申しました。その樣子をみるとこの子は遊びが面白くてたまらずに、もつと遊びたいから「なぜ？」といつたとは思へませんでした。「なぜ？」といひながら、さつさとお母さんの方へあるいて參ります。そこでそうつと伺つて見ましたらばそこのお宅ではどうも理屈

ぼい方々が多くて御老人との間にいつも「なぜ？」といふような心持がたゞよふてゐるといふことでした。お氣の毒だと思ひました。

かう考へて來ますと、子供の發問に對して、その眞面目さといふものがいかにも難しいように思はれますが、實際子供にあたつて見れば、これはたやすく洞察されることです。「なぜ？」ときかれたその瞬間に兎に角、子供の頭腦を混亂させず、偏見や、迷信におちいれないように答へることが大切ですから、全く子供に答へることは、

○一つの技術

といつてもよいと思ひます。理屈ぽく考へてゐると、かへつて餘計なことを言ひ過ぎて、あのデリケートな頭をごた〳〵にしますし、さうかといつて、うるささうにおひはらへば、折角のやさしい心持をきづつけます。殆んど限りのない、豫期しがたい、その折々の質問には、全く臨機に取扱ふといふほかはありますまい。たゞ私のいつも思ひますことは、どうしても私共の頭は、子供からかけはなれてゐるといふことです、子供同士で問ひ、答へてゐるのをきいてゐますと、いかにも自然で、所謂無邪氣です。どうも私共が答へると餘計なことがはいりすぎて簡明にまゐりません。五つや六つの子供が地球が圓いとか、太陽のまはりをまはつてゐるなどゝいふことを知らないからと云つて、その子は不幸だといふわけもありませんし、むしろ大きくなつてからわかることは、幼ないころに知らせなくてもよいことなのですから、しかし簡明にと思つて、よいかげんな答をするのはいけないと思ひます。前にも申したやうに、子供の發問にはいろ〳〵の種類があつて、そのどれもこれも、子供があの未發達の頭腦で納得が出來るように答へてやることは難しい、否、不可能な場合さへあります。ですから、

○聞かせたくないこと聞かせなくてもよいこと

を問はれた場合には、曖昧に胡麻化してゆくよりも、「坊が今に大きくなればわかりますよ」。と、いつた方が、かへつて子供に對して親切な仕方だと思ひます。私共人間にはどんな學問をしても、尙わからないことがあるのですから。わづかこの世に來て五年か

六年しかたゝない子供が、何もかもわからう筈がありませんもの。そしてまた、「いまはわからない」といつたからとてそのために、幼兒のあの盛な發問の流を堰きとめるといふ心配は更にないと思ひます。よい加減に答へられて、それが迷信となり偏見となつて彼等の一生をわざわひするものよりも、どんなによいことでせう。

○子供と一緒に考へる

全く思ひがけないことを、突然に問はれると、いかに經驗をつんだ人でも、すぐ返答に困るものです。さうかといつて不用意に答へて間違つた事を云つたり、あとでとりかへしのつかぬような答をしてはいけません。そこで、私はかういふ時に、すぐに答へないで、「さあ、なぜでせう」。と一先づその問をうけとつて子供と一緒に考へるようにして居ります。たとひ三十秒でも一分でもそこに餘裕をつくりますと、こちらも相當のよい考へが出て參りますし、また、一寸その餘裕で子供は大抵自分で何とか解決して行きます。(しかし子供が物の名をきく場合には單にその名を簡單に考へてやればよいので、かうした心配はいりません)それからまた、そこに遊び仲間が二三人居る時には、子供同士でいかにも滿足な答を得てゆくといふこともあるものです。

私共大人の言動は、どうしても子供の心持にふかくはいりやすいものです。—威信(プレスティージサゼッション)による暗示のために、子供は、大人、ことに、親や、兄姉や、先生の言葉からつよい印象をうけてこれがことに幼ない時には先入主となりやすいのですから—ですから、たとい、子供の發問に氣まぐれなところがあるとしても、答へるのに不統一で、また出まかせでは子供が迷惑します。

私共はなか〳〵いろ〳〵の事に頭が忙しいのですから、子供に、しかも幼稚園などで大勢に次から次へとたえまなく質問されると、うるさくもあり、不機嫌にもなります。けれども、かうして子供は生ひ育つてゆくと思へば、力のおよぶかぎり親切に、そしてまた、子供相當の滿足を與へるようにその質問に應じてまゐりたいものです。かうは申しますものの、實際には、なか〳〵容易なことではございません。それこそ何をきゝ出すかわからないのですから、もつとも、だん〳〵大きくなつて小學校にも、そ

の上にもゆくようになれば餘程論理的になりますが、幼兒期の取扱ひはまことにむづかしいと思ひます。

近代哲學の父と稱せらるゝデカルトの子供時代には、やはり質問が大好きで、いつも親兄弟を手こづらしたとの事です。あまり質問好きなので、『小さい哲學者』と云ふ綽名を家でつけました。その可愛らしい質問狂が遂には大哲學者となり、「我思ふ故に我あり」などゝ云つた處をみると、數知れぬ質問を自ら發した揚句に、此の一大鐵案を得たかとも思はれ、獨りでにほゝ笑まれます。

○編輯室より

△春になりました。寒さにかぢんでゐたすべてのものがのびのびとして新しい歌をうたふときが來ました。

△來月は本會の主催で兒童保護宣傳の催しがあり、五月には大分市に第三回全國幼稚園關係者大會があります。いよ〳〵活動の時が來ました。

本誌定價

一冊(郵稅共)金貳拾五錢　六冊　前金壹圓五拾錢
十二冊　前金　參　圓　(郵券代用壹割增)

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正十年三月十二日印刷
大正十年三月十五日發行

東京市下谷區花園町一番地
編輯兼發行者　黑瀨艶
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　杏林舍
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行所　日本幼稚園協會